

敬和学園大学における リベラル・アーツ教育をどう考えるか

鈴木 佳 秀

はじめに

掲げた課題を取り上げる際に、まず敬和学園大学の建学の精神に触れておく必要がある。敬和学園大学は、新潟県、新発田市、聖籠町の多大な支援の下で、1991年4月に設立されたが、キリスト教主義、国際主義、地域主義を教育方針として掲げ、キリスト教主義リベラル・アーツ教育を標榜する教育大学として発足した。

大学の教育研究理念と教育研究目的は、本学の学則第1条に次のように明記されている。「本学は、教育基本法（昭和22年法律25号）及び学校教育法（昭和22年法律第26号）に従い、福音主義キリスト教の精神に基づく自由かつ敬虔な学風の中で真理を探求するとともに心の教育を実践し、国際的教養豊かな良心的人材を育成することを目的とする。」

平成19年に教育基本法や学校教育法が改正されたので、大学が設置された時の昭和22年の基準に則した学則のまま、教育活動を続けることは難しくなったと言わざるを得ない。しかしながら、敬和学園大学はミッション・ステートメントを定め、独自の教育方針を貫いてきたことは事実である。そこには「敬和学園大学は、キリスト教精神に基づく自由かつ敬虔な学風の中でリベラル・アーツ教育を行い、グローバルな視点で考え、対話とコミュニケーションとボランティア精神を重んじ、隣人に仕える国際教養人を育成します。」とあり、これは2002年12月教授会での承認を経て制定されたものである。私立学校法が改正されてもこの基本的な姿勢は不動である。

また本学のスクール・モットーも、「敬和」と命名された時の聖書の言葉に遡り、「神を愛し、隣人を愛す（Diliges Deum et Proximum）」（マルコによる福音書12章28節～34節）と表現されている。キリスト教リベラル・アーツによる教育理念を、本学では、聖書の言葉「あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にする」（ヨハネによる福音書8章32節）を根拠にしていることもよく知られている。

ミッション・ステートメントやスクール・モットーも、要約すると「神に仕え、人に仕える」精神（新井明前学長による）ということに尽きている。しかしこの理念は、キリスト教でなく、キリスト教主義に基づくことに注意を向けておきたい。特定教派の神学や宗教でなく、聖書の思想を基盤にした知的な学びを重視したもので、言うまでもないことで

あるが、敬和学園大学は信徒養成機関でなく、高等教育機関であり、キリスト教思想を土台にしたリベラル・アーツ教育をもって国際教養人を育成する目標を掲げているからである。

I キリスト教精神に基づくリベラル・アーツ教育の諸前提

キリスト教精神に基づくリベラル・アーツ教育の諸前提について、それぞれの特質に分けて語ることにする。

A カリキュラムの背後にある教育理念

21世紀教養人の教養の基準として、本学は、『2007年度敬和学園大学の現状と課題－自己点検・評価報告書』において、次のように明文化している。

- ① 21世紀の教養人は、分析的・批判的に考えて、明瞭かつ効果的に考えることができる（主に演習教育の理念）
- ② 21世紀の教養人は、少なくとも一つの外国語を操ることができる（主に外国語教育の理念）
- ③ 21世紀の教養人は、コンピューターを操ることができる（情報教育の理念）
- ④ 21世紀の教養人は、異なる文化について複眼的に見ることができる（主に専門教育の理念）
- ⑤ 21世紀の教養人は、倫理的基準を持ち、他者に奉仕することができる（主にキリスト教主義教育の理念）

B 対話とコミュニケーションを重視する精神

カリキュラムと連動する教育理念として位置付けているのは、ミッション・ステートメントが、教室の中だけで実現される理念でなく、現場での実践と経験を重視する教育理念でもあるからである。対話に必要なのは、相手の価値観や文化的素養を対等なものとして受け入れる精神であることに、異論はないであろう。

コミュニケーションの成立では、相手への配慮に大きく依存することは多言を要しない。相手の人格を尊重することは、言うまでもなく価値観や歴史、文化を尊重することに尽きている。それを教育の現場で、相手に配慮する精神的な強さ、しなやかさを育成するのが、本学の教育目標であると言える。大学生活の中に、そうした精神を育成する機会を設けているのも事実である。例えば、建学以来、ボランティア活動の積極的推進や、チャペル・アッセンブリ・アワー（CAH・金曜日の2限に実施）を活用していること等があげられる。

C ボランティア活動の精神と隣人に仕える愛

カリキュラムと連動する教育理念にボランティア活動が位置付けられているのは、ミッション・ステートメントを実現させるために、ボランティア活動を正規のカリキュラムに取り入れているからである（共通基礎科目）。

また本学は、ボランティア・センターを設置し、職員を配備して積極的にボランティア活動を支援している。ボランティア活動は、それに従事した学生には単位が認められる仕組みになっているが、活動そのものは義務でなく、自主的な活動（ボランティア）であり、強制はしていない。

ボランティア活動の精神を重視することから、本学は、2004年に学科を改組し、共生社会学科を設置して社会福祉の分野に人材を送り出すために制度改革を行ない、かつ隣接する「富塚・のぞみの里」での実習等により、人材の育成に従事するようになった。

チャペル・アッセンブリ・アワーで、国際ボランティアで活躍している人の講演等を学生諸君に提供しているのは、いずれも彼らの自覚を高めるためである。ボランティア活動に従事する精神は、自発性の涵養にかかっているので、教育の成果でしかはかれないからである。

そこで、ボランティア活動を支える精神的な理念について触れておく必要がある。敬和学園大学が掲げる理念は、神と人とに仕える精神、キリスト教精神による人格教育である。それは隣人に仕える愛に尽きているが、この精神との関わりから言えば、ボランティア活動は無償であり、本来は見返りを求めないものであるはずである。活動に参加することで、人に仕える心が自然に身につく大切さを経験してもらう教育でもある。従って、自分の生活を律している状態でなければ、ボランティア活動はうわべだけの形式主義に陥る危険がある。

本学がその理念をキリスト教精神に置いているのは、学生諸君が、真摯な態度と愛の気持ちから活動に従事することの大切さを知り、それを経験し、自己犠牲の尊さを学ぶことのできる価値のゆえである。隣人愛の精神は、見返りを求めない自己犠牲の精神に尽きている。事実、ボランティア活動のルーツは、赤十字が創設される要因となったナイチンゲールによる敵・味方の区別なき傷痍軍人の看護救助行為に遡るのであるが、彼女の行為がキリスト教精神から出たものであることについては、論を待たない。

Ⅱ リベラル・アーツ教育の目標と課題

ここでは、リベラル・アーツ教育が掲げているその教育目標や、さまざまな課題について触れてみたい。

A なぜグローバルな視点の育成が可能なのか

いずれの高等教育機関でも、グローバルな視点の重要性をその教育目標に掲げているのは事実である。グローバルな視点は、ローカルな視点と対立するものでなく、共存すべきもの（グローカル）であることを、今ではどの教育機関でも力説している。

しかし、現実の世界は、ローカルな発想だけでは成り立ちゆかない時代状況にあり、日本から東アジア地域に目を向けているだけでは、真の意味でのグローバルな視点は育たないのである。それだけでなく、宗教的に異文化の世界、西欧世界の文化の根底にあるキリスト教主義やその歴史を学ぶことにより、向こう側から日本を見る、即ちローカルな視野をインターナショナルな視野へと広げる意義をわれわれは自覚している。そうした使命を、敬和学園大学は担っていると考えている次第である。グローバルな視点と両立させて実施される教育が持つ意義は、決して小さくない。

敬和学園大学には、キリスト教主義による教育によって、グローバルな視野を育む独自の取り組みがあると言えるであろう。人文学部だけの、一学部による構成であるが、英語文化コミュニケーション学科、国際文化学科、共生社会学科の三つの学科は、いずれも異文化理解を重視したカリキュラムを展開し、社会科学や福祉活動を含めたカリキュラムを提供し、共生を目指した国際教養人の育成という目的に対応しているからである。

また本学の特徴の一つとして、外国語教育を重視した教育を掲げている。ネイティブの教員の充実によってグローバルな視点の育成を強化しつつ、コミュニケーションの手段としての外国語教育を重視しているのは事実である。

B なぜ対話とコミュニケーションを重視する精神の育成が可能なのか

キリスト教主義による教育の特徴として、本学では、異文化の価値を尊重し、差別感覚のない、自由な精神の確立を目指したキリスト教主義に基づく、リベラル・アーツ教育を充実させてきた。

自由な精神の確立を目指した教育とは、少人数の授業における教員と学生同士のコミュニケーションを重視すること、相互の討論を通して相手の思想や価値観に理解を持たせる、という点に見られる。また、クラブ・サークル活動を支援しつつ、スポーツや文化活動の分野でも、人間性豊かな個性を育成することを目指している。

対話とコミュニケーションを重視する精神とは、相手の個性を尊重し（敬）、相互の個性を重視する精神（和）を基礎としており、敬和学園の理念と連動するものである。敬和学園大学の理念は、キリスト教主義に基づく人格教育を推進することにあるという点については、繰り返し触れてきたが、簡潔に言えば、他者に心を開くことのできる人材の育成を目標としていることに尽きる。このように、キリスト教主義による教育を掲げるところに、新潟県内の他の私立大学における教育とは異なる、独自の展開があると考えている。

C なぜボランティア活動の精神と隣人に対する愛の薫陶が可能なのか

ボランティア活動のルーツとキリスト教的隣人愛の精神との関わりについては既に触れたが、他方で、キリスト教主義による教育に、聖書の言葉が活かされていることについても冒頭で触れた。

なぜこのことを強調するかと言えば、ボランティア活動が効率論で終わる危険があるからである。他者のための純粋な自発的行為が、大学という教育機関で実施されると、それがしばしば単位取得のためという効率性に偏り、活動に参加すればボランティアを行なったことになるという地平に行き着いてしまう可能性があるからである。それに歯止めをかける力はどこにあるのか。

本学が聖書の言葉によって立つことを力説するには、理由がある。ボランティア活動の推進に際し、例えば「善きサマリア人のたとえ」に基づく（ルカによる福音書10章25節～37節）隣人愛の精神を強調している。隣人愛を実践することは、神を愛することと同等のこととして、イエスは語っている。この精神的裏付け、あるいはその価値付けがなければ、「ボランティア」という名前の活動を行い、単位を修得したということが終わってしまう危険があると考えているからである。

隣人愛の実践は、キリスト教徒の独占物ではない。また信仰者だけが行う慈善事業でもない。聖書が語る隣人愛の思想は、世俗の世界で実践できることとして語られているので、リベラル・アーツ教育に活かし得るものなのである。

隣人に仕える精神は、知識と経験の両面で習得できるものだが、リベラル・アーツの現場で、実践的に身につくように工夫する必要がある。隣人に仕える精神とは、言葉だけ、あるいはスローガンだけのものではないからである。他者のために僅かな自己犠牲を惜しまないこと、あたたかい心遣いや配慮を自ら進んで行なうという、この精神が身につけているならば、異文化世界に生きる他者に、あるいはハンディキャップを負っている人々に、心を開くことが可能になるであろう。その意味で、心の教育における聖書の学びの大切さを強調しておきたいと思う。隣人に仕える精神こそが、

他者との対話とコミュニケーションを円滑にしてくれるよりどころとなる、と理解している次第である。

共生の思想的な核は、実は神を愛し人に仕えるこの精神にのみ存在するとすら言える。敬和学園大学は、この精神を教育理念とすることで、信仰を強制することなく、リベラル・アーツ教育の実をあげようと確信している次第である。自覚的にこの精神を生きようとする姿勢が構成員にあるかどうか、敬和学園大学の未来を左右するとと言えるであろう。

Ⅲ キリスト教精神に基づくリベラル・アーツ教育の特質と成果

ここでは、既に触れた理念や建学の精神に基づき、改めて、教育の現場で必要とされていることについて、その思想的背景から解説を試みてみたい。

A 国際教養人を育成できる素地はどこから生まれるのか

国際的感性を育成するリベラル・アーツ教育の要として、アジアだけでなく欧米の歴史や文化に関する知識を身につけることや、海外（留学）経験を積むこと等が不可欠であると本学は受け止めている。

日本から見て、異文化地域の価値観や文化的特質を学ぶ必要は、いずれの教育機関でも強調されているところで、それに異論はない。東アジア地域から東南アジア、南アジアから西アジアへの広がり、諸地域の歴史や文化の学びが展開されると同時に、本学でも、海外経験を積ませるため留学を奨励してきたのはそのためである。

これら国際人養成は、県内の他大学でも積極的に展開しているところであるが、しかし本学はそれとは少し違うスタンスを取っている。ユダヤ教、キリスト教、イスラム教についての基礎知識を提供するように、特に心がけているからである。これら世界宗教の誕生地は西アジアで、いずれもアジアの宗教であることを知識として知っておく必要があるが、それぞれの宗教的伝統、それぞれの個性や慣習の相違などについて、その由来は一般にほとんど知られていない。敬和学園大学では、こうした知見を養う場が提供されているのである。チャペル・アッセンブリ・アワーや宗教関連の講座が提供されているからである。

グローバルな視点で、ヨーロッパ世界に広まったキリスト教の歴史や思想を学ぶ意味は、決して小さくない。異文化の世界を知る際に、それらは不可欠な要素だからである。ヨーロッパだけでなく、アジアや南北アメリカ、アフリカまで含めた国際世界についての知見を育成するため、国際交流の実をあげる目的で留学制度を強化し、国際的感性を育む具体的な機会を学生諸君に提供するようにしているのもその一環であ

る (JCLP (Japan Culture and Language Program) /ACLP (American Culture and Language Program))。

B 異文化コミュニケーションを実現しうる素地はどこから生まれるのか

障害を持つ他者への配慮が育つ環境を、大学として、どのように整えることができるのか。それを、専門学校や大学という教育機関に委ねて人材を育成するというのは、簡単なようで実は至難の業と言える。

異文化コミュニケーションには、ローカルな問題とグローバルな問題の両側面があり、自分とは異なる個性との出会いも含まれる。専門教育でそうした配慮を育成できるであろうか。専門教育が陥りやすいのは、たこつぼ型の知識偏重教育に終わってしまうことであり、そうした教育だけでは、障害を持つ他者への配慮は育たないとすら断言できるだろう。現場では、知識や技術だけでなく、心のこもった配慮やきめ細やかな心遣いが求められているからである。

特殊な分野だけに通じた人材は、40才代以降、社会的責任(人間関係)に耐えられない危険があると言われている。これは、かつて新潟大学で同僚であった友人から言われたことであるが、こうした警告を口にしたこの友人は、先端的研究を進めている上場企業の研究所長を務めた人物である。彼はコンピューター関連の国際的な最先端研究に従事し、上場企業の中央研究所長を務めるほど世界に通用する研究者であり技術者であったが、彼が言うには、コンピューター関連の特殊な狭い知識や技術を集約的に蓄積していても、その知見は30才台くらいまでは有用であるが、40才代になると、世界の水準について行けなくなるという。技術の進歩が過激だからである。こうした技術者には、その後、グループを統括し、プロジェクトを推進するため人々の先頭に立ち、責任を担うという役割を期待するのだが、たこつぼ型の訓練を受けた技術者には、対人関係の訓練を受けてこなかった人が多く、そういう人に限って、異質な文化を持つ他者に対し、どのように振る舞い、どう対話をすればいいのかが分からないのだそうである。そうしたかつての技術プロは、人事的には全く使いようがなくなるのだ、と彼は語っていた。恐ろしい話である。

対話とコミュニケーションを重視するリベラル・アーツ教育が必要であるという自覚は、人間関係の海を泳ぐための訓練が不可欠であるという認識から出発している。紹介したエピソードに関連させて言うのであれば、40才になっても、50才になっても、人のために、誰かのために役立ちうる人間を育成することが大切なのである。対話やコミュニケーションを重視する際に、人間性が最も求められるからである。技術教育と同時に、心の教育が必要であったのに、若い時代から実験室に閉じ込められ、技術

だけの習得に費やしてしまうことのツケは、大きいと言わなければならない。

無論、就職することだけで人生が決まるのではない。しかし責任を担う環境で生きていくことが求められる学生諸君の現実を顧みるならば、大勢の人を指導し、グループをまとめ、チームを形成して仕事を進める能力を身につけ、訓練を積んでおくことが、就職に際して不可欠な要素ではないかと考える次第である。

C 地域を愛し、地域と共に生きる精神の育成はどこから生まれるのか

環境に意を注ぐことができる精神は、地域と共に生きる精神に他ならない。共生の精神を育み、育成できるのは、理工学系、医歯学系の専門学部ではない。そうした専門学部では達成できない精神的な訓練が、必要だからである。本学は、人文学部であるがゆえにそれを実現できる可能性がある、学長として確信している。大勢の学生を抱える専門学部の教育では、地域を愛する精神の涵養などは、ほとんど期待できないからである。

ボランティア活動など、実践と経験の場を提供しながら行なうリベラル・アーツ教育のみが、それを達成し得るのではないか。地域の歴史と文化に対する視野を持つことを重視する上で、オープン・カレッジを展開してきた。また敬和学園大学は、新発田学研究センターを開設し、十二齋市の復興に参加し、阿賀北ロマン賞の創設にかかわってきた。これらに見られるように、具体的な活動の場を、地域の方々と学生諸君とに提供してきたのである。学生諸君はそれに応えるかのように、まちカフェ Link を出店したのだが、これらは、地域社会との共生という精神に基づき推進されているものである。

また、敬和学園大学におけるオレンジ会の存在、後援会の存在を通じ、在学生が地域との直接の繋がりを実感できる体制を有しているのも、本学の特徴の一つである。

おわりに

最後に、地域に生きる敬和学園大学の使命とリベラル・アーツ教育の役割について、幾分個人的な願いも交えつつ、いくつかの希望をまとめて今回の締め括りとしてたい。

地理的な特質として、聖籠町、新発田市、新潟県の支援を得て、この富塚の地に大学が設置されたことの意味は極めて大きいと考えている。この地域の方々と共に、この地域を愛し、この地域のために生きる大学として出発したからである。この姿勢に、ブレは一切ない。

オープン・カレッジを展開する施策等を重視してきたのは、市民参加の企画を立案し、

展開する体制を重視しているからである。相互に啓発する機会を、積極的に持とうとしてきたからに他ならない。

大学として、地域社会に発信する機会を拡大する施策を重視してきたのも、何より、若い人材を育成し、彼らを地域社会に送り出す体制を維持することに留意してきたからである。

教育理念とキリスト教主義について言えば、我が国でリベラル・アーツ教育を実践している大学は少なくない。だが、キリスト教主義を掲げ、国際教養人を育成しようとする大学は、決して多くない。敬和学園大学のように、少人数であるが、ローカルな視点を堅持しつつ地元や地域に命をかける教育は、グローバルな視点を持つがゆえに可能であり、グローバルな活動に命をかける教育は、ローカルな視点なしには不可能であると考えている。共生という概念を、そのように理解している次第である。

阿賀北ロマン賞に見られるように、文化的に貢献できる機会をより多く持つことを目指しているのは、人材を発掘しつつこの地から文化を世界に発信するのが、わたくしどもの幻だからである。

また、敬和学園大学の特有の、個性的な教育研究プロジェクトを育成しなければならないと個人的に考えている。

リベラル・アーツ教育の成果をあげるには、建学の理念の実現に向けた、情熱が不可欠であると思っている。この情熱がなければ、大学は衰退してしまうからである。

何かのために生きることよりも、誰かのために生きingことを重視した教育環境を整えたいと、個人的には考えている。それが、異文化交流やコミュニケーション、ボランティア活動等の理念を支える原点ではないかと個人的に思っているからである。

キリスト教主義の大学の特徴を生かすため、不断の検証評価が必要で、そのために教職員の高度化が大切であると考えている。